

55 お召し列車

船旅には注文をつけなかったエリーザベトですが、彼女専用のお召し列車は極めて豪華に内装させ、この列車でヨーロッパ中を旅行しました。ここに再現された彼女のサロンをご覧ください。オリジナルのままに保存された寝台車は、産業技術博物館に展示されています。

56 旅の目的地

「旅の目的地が重要なのは、その間に道程(みちのり)が有るからです。もし何処かに到着した後、そこから二度と出発できないなら、天国のように素晴らしいところでも、私には地獄となります。」エリーザベトは、このように書き残しています。彼女は、ますます旅から旅へとさまようようになり、家族と側近の人々も、憂いに沈んだ皇后の身を案ずるようになりました。1897年、末娘マリー＝ヴァレリーは日記に次のように記しています。「困ったことに、ママは以前よりも一層ひとりであることを好み、悲しい話ばかりするようになった。」また1898年5月の日記には次の文章が見られます。「…以前には時々現れるだけだった深い悲しみが、もうママから離れなくなってしまった。今日もママは、度々死にたくなると話していた…」

57 暗殺と埋葬

1898年9月、エリーザベトは保養のため、数週間に亙りモントルー近郊のテリデに滞在しました。9月9日、彼女は側近のイルマ・スタライ伯爵夫人を伴いブレニーに足を伸ばし、ロートシルト男爵夫人を訪問しました。その晩エリーザベトはジュネーブに向かいました。ここで一泊し、翌日モントルーへ戻る予定だったのです。いつもの通りエリーザベトは、ホーエネムス伯爵夫人の偽名を使い、お忍びで、シマン湖畔のホテル「ボー・リヴァージュ」に泊まりました。ところが、どこからか「オーストリア皇后滞在」の極秘情報が漏れ、翌日の新聞に報道されました。この記事を読んだ一人が、ルイジ・ルッケーニでした。彼はイタリアのアナーキストで、フランスのオルレアン公を暗殺するためジュネーブに来たのです。土壇場で旅程を変えたオルレアン公はジュネーブには現れませんでしたでしたが、ルッケーニは失望ませんでした。偶然にもオーストリア皇后という素晴らしい犠牲者を見つけたからです。9月10日の午前中、エリーザベトはお気に入りの菓子店で買い物をしました。モントルーに向かう正午の船に乗るつもりだったのです。船着場へ向かう湖畔の道で待ち伏せていたルッケーニは皇后に飛び掛り、研ぎ澄ましたヤスリで胸を突き刺しました。エリーザベトは倒れましたが、ただ驚いただけで再び立ち上がりました。単に突き倒されたものと思ったのです。彼女は乗り遅れないため先を急ぎ、乗船した直後に倒れました。彼女の胴着が開けられ、初めて小さな刺し傷が発見されました。船は直ちに引き返し、瀕死の皇后は再びホテルに運ばれましたが、まもなく息を引き取ったのです。訃報に接したフランツ＝ヨーゼフは、側近に対し言葉少なに語りました。「私が、どれほど彼女を愛していたか、君には分かるまい。」エリーザベトの亡骸はウィーンに運ばれ、カプツィーナ墓所に安置されました。その悲劇的な最期によって、彼女は不滅の人となったのです。存命中の彼女に対する批判は影をひそめ、残されたのは、神々しい絶世の美女の思い出だけでした。こうして、シンシイ伝説が生まれたのです。

皇帝の部屋見学コース

58 護衛官の控え室

ここから、皇帝夫妻の歴史的な居住空間が始まります。まずはフランツ＝ヨーゼフ皇帝の一連の部屋で、その後にエリーザベト皇后の部屋が続きます。

59 謁見の間、控え室

フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、自らの住まいとして帝国官房宮を選びました。ここには数々の執務室とプライベートルームがあり、皇帝は1916年に世を去るまで、ここで暮らしました。皇帝は週に2回謁見を行いました。謁見の日は新聞に公示され、謁見を許された人は指定の日時に、豪華な皇帝の階段を通じて、この部屋に入り、謁見の間に呼ばれるのを待ちました。壁の3面には、豪華な壁画が見られます。これは1832年ヨハン＝ペーター・クラフトが制作したもので、オーストリア皇帝フランツII世の生涯から歴史的な出来事を描いたものです。

60 謁見の間

皇帝は、ここで人々を迎え、書見台の前に立って謁見を行いました。書見台の上にはリストが置かれ、その日訪れる人々の名前と来訪の理由が、謁見順に記されていました。こうして人々は、直接皇帝に話し掛けることが出来たのです。その内容も、勲章を受けた感謝、家族に対する恩赦の願い、個人的な用件など、様々でした。皇帝は午前中に100人に上る人々を迎えたので、個々の謁見は通常、数分に過ぎませんでした。皇帝は僅かに頭を傾け、謁見の終わりを合図しました。

61会議室

ここでは「ミニスター・コンセイユ」と呼ばれる大臣会議が行われ、皇帝自ら常

に議長を務めました。後方の壁龕(へきがん)横に見られる大理石の胸像とサーベルは、王朝時代の最も名高い軍人のひとり、ラデツキー將軍を記念するものです。けれども、彼の名を世界に広めたのは、ヨハン・シュトラウスI世の作曲した「ラデツキー行進曲」です。大きな絵画には、1849年のハンガリー革命における戦闘が描かれています。開けられた扉を通して、皇帝の衣裳室が見られます。皇帝存命中は、この部屋に、皇帝の衣服を納めた洋服ダンスや戸棚がありました。フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、殆ど常に軍服で過ごしました。私服を着用するのはプライベートな旅行の時だけで、狩猟の際には伝統的な皮製のズボン、緑のベストにシュタイヤマルクの帽子を愛用していました。

62 執務室

フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、多民族国家の皇帝たる責務を極めて真摯に受け止め、豪華な儀式よりは日常の執務を重視し、自らを、人口5600万人に上る帝国を管理する第一の役人と考えていました。従って皇帝は1日の大半を執務室で過ごし、無数の書類に目を通し署名しました。毎日の執務は午前5時から始まり、公式のディナーやレセプション、舞踏会などの後、深夜まで続きました。仕事机の前と左側の壁には、フランツ＝クサヴァー・ウィンターハルターが描いたエリーザベト皇后の肖像画が見られます。彼は愛する皇后を「天使のようなシンシイ」と呼び、とりわけ、これらの肖像画がお気に入りでした。開かれた布張りの扉は、皇帝の部屋付き侍従オイゲン・ケッテールの部屋に続いています。彼の職務は、皇帝の身の回りの世話をすることで、常に皇帝のために待機し、執務室に朝食や軽い食事を運びました。

63 皇帝の寝室

皇帝夫妻が別々の寝室を使用するようになったため、この部屋が皇帝の寝室として内装されました。フランツ＝ヨーゼフが使用したのは簡素な鉄のベッドで、ここにも皇帝のスバルタ式生活態度が反映しています。フランツ＝ヨーゼフ皇帝の日常生活は、早くも日の出前の午前3時半から始まりました。前夜に大きな公式行事のあったときだけ、皇帝は1時間余分に眠りました。毎朝、先ずゴム製のバスタブが寝室に運び込まれ、入浴係が皇帝の入浴を手伝いました。ベッドのそばには、簡素な洗面台が見られます。フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、プライベートルームに簡素な内装を好んだばかりでなく、あらゆる贅沢を無用の長物と考えていたのです。服を着た後、皇帝はベッドの脇の祈祷台に跪いて朝の祈りを捧げました。皇帝の朝食は、早くも執務室に運ばれました。

64 大サロン

皇帝の他の部屋同様、内装の大半は18世紀に遡ります。他方、家具類はフランツ＝ヨーゼフ皇帝時代に作られました。王宮内の全ての部屋と同様、ここにも磁器のストープが見られます。古い時代には、部屋を汚さないため、裏の通路にある焚き付け口から、王宮ストープ係が燃料を燃やしていました。ようやく1824年になって配管工事が行われ、ストープを加熱するため、熱風が送り込まれるようになりました。

65 小サロン、メキシコ皇帝マキシミリアン記念の間

フランツ＝ヨーゼフ皇帝の時代、この部屋は紳士のための喫煙サロンでした。当時は貴婦人の前でタバコを吸わないのがエチケットだったのです。今日ここは、フランツ＝ヨーゼフの弟でメキシコ皇帝となったマキシミリアンを記念する部屋となっています。右側の壁には、マキシミリアンの肖像画が見られます。1864年、彼は皇帝として即位するため、妻のシャルロッテとともにメキシコへ向かいました。ベルギーの王女だった彼女は野心家で、メキシコの極めて困難な政情にもかかわらず、皇帝となるよう夫を説き伏せたのです。彼女の肖像画は、左の壁に見られます。ところが即位から間もなく、フランスは約束していた援助を撤回しました。全く孤立したマキシミリアンは、ベント・フアレス率いる革命軍に捕らえられ、1867年に銃殺されました。皇帝の居住空間は、ここで終わります。

66 エリーザベト皇后の住まい、居間兼寝室

1857年からエリーザベトは、アマリエンブルクの2階を住まいとするようになりました。エリーザベトは、この部屋をプライベートな居間としたほか、寝室としても利用しました。ベッドは部屋の中央に置かれ、ついだてで仕切られました。背後の窓際に置かれた机で、彼女は手紙のほか、膨大な量の詩の幾つかも書いています。現在、机の上には、彼女の遺言書のファクシミリが置かれています。

67 化粧と体操の部屋

化粧と体操の部屋は、エリーザベトにとって最も重要なプライベートルームで、彼女は大半の時間を、ここで過ごしました。左には、エリーザベトの化粧台があります。お付きの美容師が髪を結う間、彼女は毎日2〜3時間この前に座りました。この時間は、読書と語学の勉強に当てられました。エリーザベトは英語とフランス語のほか、ハンガリー語を完全にマスターしていました。エリーザベトはギリシャ古典と神話の熱烈な愛好者でした。化粧台の脇にある小さな椅子には、大抵の場合、ギリシャ人の朗読係コンスタンティン・クリストノスが坐り、長い髪結いの時間に「オデュッセイア」か「イリアス」を朗読し、また皇后のギリシャ語を添削しました。彼女は古代ギリシャ語に加え、現代ギリ

シャ語もマスターしていました。この部屋で皇后は、そのスリムなボディーラインと健康を保つため、毎日体操に励みました。これは、当時としては驚くべきことで、宮廷人からは全く理解されませんでした。ここには、肋木、鉄棒、扉の枠に取り付けられた吊り輪が見られます。

68 トイレ

化粧室の次には、エリーザベト皇后の極めてプライベートな部屋が続きます。通路の右手には、皇后のトイレが見られます。これは、当時としては最もモダンな水洗トイレでした。イルカをかたどった磁器のトイレの横には、小さな手洗いも見られます。

69 バスルーム

1876年エリーザベトは、化粧室の背後に、現代的な意味でのバスルームを設置させました。これは皇帝家のメンバーとして最初の画期的な出来事でした。左側には浴槽が見られます。これは銅に亜鉛メッキしたものです。コックなどの部品は残されていません。ここでエリーザベトは通常の入浴のほか、スチームバスやオイルバスを楽しむ、血液の循環を良くするため冷水浴も実行しました。この部屋では、エリーザベトの洗髪も行われました。これは1日がかりの大作業で、卵の黄身とコニャックを混ぜた特製シャンプーが用いられました。特に興味深いのは、リノリウムを用いた床張りで、当時発明されたばかりの新建材でした。ここからベルグルの部屋に、お進みください。ベルグルの部屋は、更衣室として使われていたものと考えられます。

70 ベルグルの部屋

ベルグルの部屋という名称は、画家ヨハン・ベルグルに因むものです。エキゾチックな動植物を配した風景画は1766年にベルグルが制作したもので、ファンタスティックな南国の自然に入り込んだような印象を受けます。少し時間をかけて、生き生きと描かれた小さな小鳥や蝶、果物など、風景の細部をゆっくりご覧ください。次の部屋はエリーザベト皇后の小サロンです。その前に、左手にある部屋番号71の大サロンをご覧ください。

71 大サロン

ここは、エリーザベトが来客を迎えるサロンでした。コーナーに置かれた大理石像は、イタリアの彫刻家アントニオ・カノーヴァが制作したポリヒュムニアで、1816年ロンバルディア＝ベネト王国からオーストリア皇帝フランツII世への贈り物として、ウィーンにもたらされました。また、ここには朝食のテーブルが再現されています。皇帝夫妻は、時々朝食をとともにしました。その様子を描いた当時の絵も、ご覧ください。

72 小サロン

ここはエリーザベト皇后の小サロンです。当時ここには、フランツ＝ヨーゼフ皇帝、皇帝夫妻の子供たち、ギーゼラ、ルドルフ、マリー＝ヴァレリーの肖像が飾られていました。内装はオリジナルですが、現在は、30才で自殺したルドルフ皇太子の肖像画が飾られています。

73 大きな控えの間

エリーザベト皇后は、隣接するレオポルト宮の「驚の階段」を上がり、警護官の部屋と控えの間を通じて自らの住まいに入りました。壁に飾られた絵画は、18世紀前半マリア・テレジア時代のもので、当時の様式は、フランツ・ヨーゼフ皇帝の時代にも、ネオロココとして、ホーフブルク王宮の内装に用いられました。2つの絵画には、名高いオペラの場面が描かれています。グルックの「混乱したパルナス」とガスマンの「愛の勝利」で、マリア・テレジアの子供たちが演じたものです。1枚の絵には、マリア・テレジアの末娘マリー・アントワネットがバレリーナとして描かれています。

74 アレクサンドル皇帝の部屋/通路の部屋

ここはアマリエンブルクの北側で、バルハウスブラッツの広場に面しています。1814年から1815年にかけて、ヨーロッパの国家元首が一堂に会したウィーン会議開催中、ここには、ロシアのアレクサンドル皇帝が滞在しました。エリーザベト皇后の時代、彼女のプライベートな来客が、ここに通されました。また1916年から1918年まで、オーストリア帝国最後の皇帝カール世が、ここを執務室としていました。通路の部屋には、エリーザベト皇后へ贈られた品物が展示されています。ひとつは豪華なケーキ用の秤で、もうひとつは、1860年に作られたオーストリア最初のミンシです。

75 赤いサロン

皇帝カールI世のレセプションルームに当てられたこの部屋は、パリのゴブラン工房で作られた豪華なタペストリーで飾られています。メダイオン部分は、フランソワ・ブーシェの絵画に基づくものです。タペストリーは、フランス王ルイ15世から、義兄の皇帝ヨーゼフII世に贈られました。銀器コレクションのところで既に聞かれた通り、皇帝は、子供に恵まれなかったフランス王に簡単な手術を勧めたのです。

76 ディナールーム

ここには、フランツ＝ヨーゼフ皇帝時代の家族的ディナーのテーブルが再現されています。大規模な公式ディナーは、専ら大きな式典の広間で催されたのです。このテーブルも「最も高貴な食卓」の規則に基づいてセッブルされています。ごく内輪の食卓でも、厳密な仕まりが守られました。テーブルは常に豪華に飾られ、中央には、花や果物・ボンボンを盛り付けた金メッキのセンターピースが置かれました。銀の受け皿には、芸術的に折りたたまれたダマスト布のナブキンが置かれました。食事ごとに別の器が用いられ、スープとデザートは磁器で供されましたが、他の料理には全て銀器が用いられました。銀のナイフ・フォークには、双頭の鷲が見られます。食事ごとに別のワインが供され、その都度グラスも替えられました。緑のグラスには、ライン地方産のワインが注がれました。また皇帝一家の一人一人に、専用のワイン容器、水入れ、塩入れがありました。料理を温かく保つため、宮廷の厨房で作られた料理は温めた箱に入れて運ばれ、ディナールームの隣室で、炭火で温められました。後には炭に代わってガスコンロが用いられました。

皇帝は中央に坐り、その向かい側が主賓の席で、更に親族の序列と身分に従って席が定められました。女性と男性が交互に坐り、隣の人とのみ会話が許されていました。料理は、皇帝にも他の人々にも同時に給仕され、皇帝は、すぐ食事を始めました。皇帝がナイフ・フォークを置くと当座の料理が取り下げられる規定だったので、皇帝は常に、食卓の全員が食べ終わるのを待って、ナイフ・フォークを置きました。ディナーには通常9品から13品の料理が供され、最大限45分でした。コーヒーとリキュールは別の部屋で供され、紳士には喫煙が許されていました。

皇帝の部屋見学コースは、この部屋で終わります。ウィーンの宮廷における皇帝一家の日常生活に関心をお持ちの方は、ぜひ宮廷家具博物館へお出かけください。宮廷家具博物館には、ハプスブルク家の様々な宮殿で使われていた多彩な家具類とインテリアが展示されています。皇帝の部屋見学コース出口の向かい側に地下鉄U3番の駅があります。宮廷家具博物館はここから5分、3つ目の駅ツィーグラーガッセ下車です。また、皇帝家が夏を過ごしたシェーンブルン宮殿の見学コースもご覧ください。外に出られる前に、必ずオーディオガイドをご返却下さるよう、お願ひ申し上げます。外へ出られるとバルハウスブラッツの広場です。すぐ横は大統領官邸の入り口で、向かい側には総理府があります。出口にある地図で現在位置をお確かめください。

王宮見学コースにお越しいたゞき、まことに有難うございます。皆様のご来訪によって、膨大な施設が維持されています。この後も、ウィーンで快適な日々を楽しまれるよう、心からお祈り申し上げます。